

私は許される限り、命続く限り、ざっくりシリーズをさせていただきたいと考えています。

新約の最大の預言書は**黙示録**。旧約で終末預言について最も詳しく語っているのは**ダニエル書**です。**ダニエル書**は、大きく前半と後半に分けることができます。前半の**1章から6章**は主に歴史。後半の**7章から12章**は預言書。特に終末預言について詳しく書いてあります。

ダニエル書 12章

4 **ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。**

この書（**ダニエル書**）を封じておけ。いつまでですか。世の終わりまで。終わりの時まで。その意味は何なのかと**多くの者は知識を増そうと捜し回る**のですが、封じられている書物なので、なんぼ捜してもなんぼ考えても、終わりの時まで分からない。

よく“読書百遍意自ずから通ず”とあって、どんなに難解な本でも、百回読んだら意味が見えて来ると言うじゃないですか。

ところがダニエル書は、ダニエル書だけ100回読んでも意味が分からない書なんです。

しかし、それが分からないのは**終わりの時まで**。終わりの時になると、ダニエル書を解くことが出来る大きなカギを提供する本が出て来ますね。それが**黙示録**です。

黙示録 22章

10 **また私に言った。「この書のことばを封じてはなりません。時が近いからです。」**

ダニエル書の最後は「封じておけ。」聖書全体の最後の**黙示録**の、最後の章の**22章10節**には「この書のことばを封じてはなりません。時が近いからです。」

黙示録をもってダニエル書を解くことができます。黙示録なしに、ダニエル書単独だけで何十回読んでも不可解な書物ですが、黙示録全体像をもって初めて、ダニエル書を解くことができる。

私たちは『**ざっくり黙示録**』で一応1章から22章まで全部やりました。覚えておられますか。

その知識をもって、聖書はなんと緻密に関連しあっているのか。

黙示録によって、ダニエル書の意味をなんと深く探ることができるのか。

これを皆さんと一緒に追体験出来たら素晴らしいと思い、これからダニエル書を見て行きます。

今日はダニエル書の前半部分を一緒に考えたいと思いますが、1回目なので、概要について3つのポイントでお話しします。

1) **ダニエル書が書かれた時代背景**

1章でダニエルが過ごしているのはどんな時代か。ユダヤ人の信仰的な状態が最低最悪の時でした。

ダニエル書 1章

1 **ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。**

ここに2人の人物の名前が出て来ますね。

①ユダの王エホヤキム。ユダの王エホヤキムと聞いた時、イメージ湧きますか。

「エホヤキム？食べ物かよ」みたいな。外国人の名前だから、なんかピンと来ないかもしれません。だけど、外国人の名前でも、例えばヒトラー・スターリン・カンボジアのポルポトとか聞いたら、「ああ、あの人！」とイメージ湧いて来ますね。しかも悪いイメージが。

聖書に精通している人やユダヤ人たちは“ユダの王エホヤキムの治世の第三年”と聞くと、「えっ、あれかよ！」とイメージが湧くんです。

私たちは聖書を読んでいる人でも、あの辺りの人って似てる名前の方が2-3人いてるから、名前聞いてもよう分からん、となってるんですよ。エホヤキムはどんな人物だったのかを知ることが、ダニエル書が書かれた背景を知る手掛かりになると思います。

エホヤキム王の元々の名前はエルヤキムです。

お父さんにエルヤキムと名付けてもらったのに、途中で変わったんですよ。なぜ変わったのか。

当時ユダヤの国はエジプトから圧力を受けて屈服しました。前の王様はエジプトに捕らえられて、もういません。エジプトはユダヤの国を手下扱いするのですが、その時、自分の言いなりになる王子を王様にしたんですね。それがエルヤキムです。

エジプトのファラオは「おまえも王子やろ。わしの言うこと、何でも聞けよ！」と。

傀儡です。エジプト王の操り人形になるために立てられた王がエルヤキム。

その時ファラオが「名前変えろ」と言うんですね。「おまえの名前は今日からエホヤキムや。」

名前は非常に重要なんです。名付けた人と名付けられた人の関係は父と子の関係。

名付けられた人より名付けた人のほうが権威的には上なんです。

ユダヤの王のお父さんが付けた名前が、エジプト王が命令した名前にチェンジされたということは、後見人が完全に入れ替わっているんですね。

だから「エホヤキム王…、エジプトの言いなりになった王や！」になるんです。

このエホヤキム王は、だれにとっても最悪の王でした。

①ユダヤの国民たちにとって最悪の王

エジプトの王はユダヤの国に莫大な貢物を義務付けました。

毎年毎年、それをエジプトに提供するために、エホヤキム王は国民に莫大な重税を課したんです。

だから、国民の生活はどんどん苦しくなって困窮を極めているにも拘らず、彼は何をやったか。

自分の宮殿を豪華なものにするために大改築工事。

「今はお金がどんどん外国に流れて行って、食うや食わずの時。王も率先して質素な生活をして、国民と苦しみを共にしよう！」そんなん ちゃいますねん。「エジプトが言うたんやから、逆らわれへんやん。みんな、重税苦しめ！ ついでに俺も贅沢する！」とやったのがこの王様。

国民に全然寄り添ってないので、ユダヤ人にとって最悪の王なんですね。

②バビロンにとっても最悪の王

当時の中東世界は、バビロンとエジプトが、その間に挟まっているイスラエルに対して色々覇権争いをしていました。

バビロンはこれから日の出の勢いで上って来るニューフェイス。ドンドン力をつけている国で、特に**ネブカドネツアル**が司令官になると、破竹の勢いで戦争に勝ち出すんですね。

それで**エホヤキム王**は、エジプト王のおかげでユダヤの王になったくせに、「時代の流れを考えたら、バビロンに寄った方がええんちゃうか」と寝返ったんですよ。

エジプト王のおかげでユダヤの王になったのに、エジプトを裏切ってバビロンに付くんですね。ただし3年だけです。何があったのか。

エジプトとバビロンがBC601年に大戦争をやるんです。その結果、バビロンが負けたんですね。この大敗北で、バビロンは軍隊を立て直すのに丸1年かかったと言われています。

それを見た時「やっばエジプトよ！」と。それで、今度はエジプト側に付いたんです。

それを見たバビロンの**ネブカドネツアル**は激怒して「コイツは信用できん。コイツは我々にとって駒にもならない。一番信用できないタイプ人間だ！」バビロンの王にとっても最悪の王なんです。

③もっと根本的問題

何よりマズイのは、**エホヤキム王**はイスラエルの神・ユダヤ人の神・聖書の神・創造主を正しく恐れることができない人物だったんですね。

勢力を盛り返したバビロンは再度エジプトと戦うのですが、その前に、ユダヤの首都エルサレムを包囲しました。包囲されたら絶体絶命のピンチなんです。

ネブカドネツアルはエルサレムを包囲する前に、当時大帝国だったアッシリアの首都ニネベを陥落させました。その方法が包囲戦・兵糧攻め。町を包囲して攻め込むのは、彼の一番得意な方法です。ニネベという大きな町ですら**ネブカドネツアル**の戦術によって落とされたのだから、このやり方をやられたら、もう藤井壮太が最後に詰めて行くのと一緒ですよ。もうどうにもできない。

あの羽生（はぶ）九段がですよ、顔面蒼白になるというね。

その包囲されている状況の中で、**エホヤキム王**は全国民に断食を命令したんです。

そして、エルサレムの宮殿にユダヤの全首長（知事）たちを集めて作戦会議をするんですが、そこに乗り込んで、みことばをバーンとぶっつけた預言者がいたんですね。**エレミヤ**です。

エレミヤは旧約聖書の預言者ですが、彼が直接言ったんじゃないんですね。弟子の**バルク**に口述筆記させたんです。25年分の預言を。

エレミヤはユダヤ人にたくさん聖書預言します。神さまのことばを語るのですが、文字として残さなかったようです。しかし、この国家存亡の危機、絶体絶命の時、皆が断食している時、その時に、「今まで語ったみことばのすべてを文字化して、巻物に書いて、それを聞かせるべきだ！」

それで、25年分の自分のメッセージを靈感された神のみことばとして巻物に書かせ、**バルク**が知事たちが集まっている所でそれを読むんですね。

その時みんな震え上がって、「これは神の裁きや。神はバビロンを使って我々を裁こうとなさっている。我々はバビロンを見るんじゃなくて、バビロンの背後にいてる主権者・神ご自身を恐れるべきだ。この預言を**エホヤキム王**の耳に入れなければならない！」

そうして、知事たちの一部が**エホヤキム王**の所に行き「**エレミヤ**から巻物（**エレミヤ書**）を預かっております。」「おお、そうか。読め。」時は冬でした。暖炉を焚いています。

エホヤキム王は暖炉に当たりながら「読めや。」傍には知事たちや他の人もいますよ。そして内容を聞いて行くと、“神はバビロンを使ってユダを滅ぼそうとしている。”

それを段落まで読ませると、エホヤキム王は小刀を取り、エレミヤ書をシュパッと切って暖炉にくべるんです。「よう燃えとるわ。おい、続き読め。」また読みます。段落まで来ます。シュッと切ってパッと放り込んで。そのようにして、エレミヤ書の原典・本物・原本は全部燃やされたんです。「でも、エレミヤ書は旧約聖書に入ってるやん。」入ってますよ。なんとエレミヤは、全部焼かれた後でもう一度同じものを作るんですよ。だから今、エレミヤ書を読むことができます。

それを全部聞いた後、エホヤキム王は「神よ、私は悔い改めなければなりません！」と心砕かれたのか。そうではなく「すぐにエレミヤとバルクを捕まえて、俺の前に連れて来い！全国指名手配にせい！」その時既に、知事たちの中の信仰的な人たちが「これ、絶対やばいから逃げてください」と隠してたんです。

イスラエルのダマスカス・ゲート（ダマスコ門）をちょっと行くと、“エレミヤの洞窟”があります。エルサレムの地下何キロも洞穴が続いて全部岩盤。「ここにエレミヤが…！」「いや、歴史的な証拠はありません」ってガイドさんに言われてですね、ものすごくガッカリするんですけどね。でも、エレミヤの洞窟、そこに身を隠したんじゃないかと言われているんです。

要するに何を言いたいかというと、目の前でバビロンがもう包囲してるんですよ。そして、エレミヤがエレミヤ書を通して「神はバビロンを使って、あなたがたを悔い改めに導こうとしている」というメッセージを聞いてるんですよ。聞いた上で、エレミヤ書を切り刻んで、暖炉にぶっこんで、そして平然と「エレミヤをぶっ殺せ」と言う。

これは、神のみことばを聞いても悔い改めることができない末期症状です。こんな最低最悪の状態の人物が、ユダヤの国の指導者になっている時代なんです。時代背景はそういうことです。ユダヤの国はまだあるんですが、非常に暗い時代だったんですね。

2) ダニエル書全体で何を語ろうとしているのか

全章にわたって語っているのは、超大国ではなく、独裁的な王でもなく、目に見えない主なる神こそがすべての歴史の背後にあって、この世界を支配しておられるということです。

ダニエル書 1 章

1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。

これ、第3版ではネブカデネザルと書いてあるんですよ。ネブカデネザルで覚えたのに変わってる。ネブカドネツアル。このほうが発音が近いんでしょうが、ヘブライ語でネブカドネツアル。ですが、彼がいたバビロン地方は文字としてはアッカド語。アッカド語の名前が遺跡に残ってます。カタカナで書くと“ナブー・クドゥリ・ウスル”。これが、なんでネブカドネツアルになんねんと。ちょっと似てませんか。似てへん？我々が日本人だからですよ。

ナブーは神の名前。ナブー神。知恵の神。バビロンの中で最高位の神です。
ギリシア神話のゼウスはマルドゥーク。太陽神。マルドゥークの息子がナブーという神です。
クドゥリには“長男”と“国境”という2つの意味があります。ウスルの意味は“守る”。
すなわち、ナブー・クドゥリ・ウスルは「ナブー神よ、私の長男を守ってください。」「ナブー神よ、私の国境を守ってください。」
ネブカドネツアルは、バビロン宗教の偶像の神々の名前が、自分の名前の中に入っているんですね。彼はバビロン最大の王様です。

ところで、バビロンという名前についても、混乱がないように確認しておきます。
ダニエル書の時代の約2000年前、ネブカドネツアルがいる同じ場所に、人類史上初の帝国がありました。**古代バビロニア帝国**。
今から2600年前にあったダニエル書のバビロンとは同じ場所ですが、別の帝国です。

古代バビロニア帝国、ニムロデがバベルの塔を建てたのと同じ場所に、ネブカドネツアルが大バビロンで君臨しているんですね。ネブカドネツアル王のバビロン帝国は**新バビロニア帝国**です。
でも、これからは新とか旧とか言いません。**バビロン/バビロニア帝国**と言ったら、いつも**新バビロニア帝国**のこととして聞いてください。

ナブー・クドゥリ・ウスル。「ナブー神よ。私の長男を、国境を守ってください」という偶像神の名前が付いているネブカドネツアルは、バビロンを大きな都に改造していきます。
ユーフラテス川に面した二重城壁の都で、三方が二重城壁、一方が一重の城壁。石のアーチに支えられた空中庭園があり、王が住む宮殿だけでなく、太陽神マルドゥークの神殿を最大限まで、城壁に入るところまで拡大しました。

そして、その神殿の北側に、なんと彼はバベルの塔を建ててたんです。ジクラートと言います。
これはアッカド語で“高き所”という意味。聖書に“高き所”はたくさん出て来ます。
礼拝所・神聖な場所。偶像礼拝するための礼拝所です。
階段状のピラミッドみたいな高い塔があって、最上階にマルドゥーク神を崇めるための礼拝所があった、と記録に残っているそうです。

このバビロンは今は廃墟になっていますが、**黙示録**を見ると、やがて人類が突っ込んでいく**艱難時代**の7年間、世界の中心地はバビロンです。
昔**古代バビロニア帝国**があった所に**新バビロニア帝国**がバビロンの町を造り、**艱難時代**になると、**新バビロニア帝国**があった同じ場所に**バビロン**の都を造ります。

7年間の前半3年半、このバビロンは世界宗教センターになります。
世界統一宗教の中心地はローマじゃない。バビロンです。
黙示録を字義通り解釈するなら、バビロンに世界統一宗教のセンターが出来ます。
そして、7年間の後半3年半は**政治経済**の中心地になります。

そのことを頭に入れて、**2主は、ユダの王エホヤキムと、神の宮の器の一部を彼の手に渡された。彼は、それをシニアルの地にある自分の神の神殿に持ち帰り、その器を自分の神の宝物倉に納めた。**

主は、ユダの王エホヤキムと（その家族も）、神の宮（神殿）の器の一部を彼の手に渡された。ユダヤの王が捕虜になって、バビロンまで引っ張って行かれた。なぜ引っ張って行かれたのか。

聖書を見ると2つの理由があります。

①「イスラエルは7年に1回土地を休ませなさい」と命令されていたのに、1回も休ませたことがなかった。②偶像を拝み倒した。

そしてユダヤの王は、預言者を遣わしても奇跡を見せても軍隊に囲まれても、何があっても神様に「ごめんなさい」と悔い改めなかった。そこで、最終手段としてバビロンに連れて行かれた。王が国からもぎ取られて行ったんですよ。これは、イスラエル・ユダヤ人が神に捨てられたという意味ではありません。ショック療法です。

私が尊敬しているクリスチャンの経営者の方が関東にいます。ハイテク部品のメーカーで、皆さんのスマホ・車・体温計の中にも必ず入っています。そんな最先端の部品を作っている企業の経営者がクリスチャンなんです。

最先端の工場なので、そこに採用される人は最先端の理系の大学院出た人か。そうじゃない。困っている人はみな雇う。中学時代の同級生が、もうずいぶん高齢なのに岡持ち持って出前で会社に来たのを見て、「おまえ、何やってんねん。」「出前やってんねん。」「おまえ、それで食っていけるんか。ウチ来いよ。」で雇ってくれるという。すごくないですか。

1か月間だけ雇うとか、そうじゃないんですよ。「雇った後、大変じゃないんですか」って聞いたら「いやいやいや…。」大変なんだと思いますけど、そんな方がおられるんです。

彼との話は天下国家のこと、会社のこと、日本経済のこと、そして最後はいつも携拳のこと。「キリストがまた来てくださる」と言っ。私もお会いするのを楽しみにしている方です。

ある時、この方の足の親指の先がちょっと傷ついたんですね。そこにばい菌が入った。「痛いなあ。でも、何か抗生物質の軟膏塗っいたら大丈夫やろ。」塗ってバンドエイドしてたら、どんどん激痛になって、熱が出て来て「もうこれは耐えられない！」救急車呼んで緊急入院したのですが、それが金曜日の夕方。ドクターたちはもういませんでした。次の日は土曜日、日曜日。2日間ドクターがいない状況でほったらかし。

月曜日にドクターが来て診るなり「すぐ切断です。」劇症型溶血性レンサ球菌感染症。一般的には人食いバクテリア症。感染して1週間で3割の人が亡くなります。昔、野球選手がこれで入院して3日で亡くなってますよ。

足を切り落とす時、どこから切り落としたかというと臀部/お尻です。というのは、真っ黒に変色しているところだけでなく、表面的には変色してないところも、既に人食いバクテリアに感染しているから。今元気そうに見えるところも余分に切り取らないと、全身に回って死にます。

でも、そんな切断したら義足着けられないんです。それどころか座れなくなるんですよ。私たちはお尻に筋肉があるから、シートに腰掛けることができるんです。臀部の片方のお尻がなくなったら座れなくなりますよ。日常生活を考えるとものすごく不便ですよ。医者は患者の生活のクオリティを上げるために頑張ってくれているのですが「切りましょう。」

なぜなら全身に回るから。それをもぎ取るとは体にもすごいダメージを与えることになるけど、ダメージを与えないと生かすことができない。

なのでショック療法というか、大きな犠牲を払ってその部分をもぎ取って、そして今もお元気です。現代医学でも、人を生かすためにダメージを与えるような治療法を用いるのです。

預言者を送って言っても分からないような状態。奇跡を見ても反応できないような状態。

悔い改めのメッセージを聞いても心砕かれられない状態になった時、イスラエル・ユダヤ人の国をもう一度再生するためには、神自身が一番心痛むことですが、もはやゼロからやり直すしかなかった。それは、バビロンに連れて行かれることです。

当時ユダヤ人たちはバビロンの色んな偶像を拝み倒している状態ですが、実はバビロンのシニアル（シュメール）は世界偶像宗教発祥の地です。

かつてユダヤ人の先祖アブラハムは、このバビロン/カルデアのウルから、偶像を捨てて約束の地に来ました。しかし、約束の地で偶像しか拝まなくなってしまう時、もう一度原点に戻す必要があったんです。

国が無くなる。王が連れ去られる。ゼロからスタートする。偶像の国で奴隷のようになる。

それは本当に惨めなことです。でも、そこまで行かないと再生がない。となった時、神は本物の悔い改めを与えるために、躊躇なくそのことを許したんですね。

この荒療治が**バビロン捕囚**です。バビロン捕囚は全部で4回あって、第1回目がこの時ですが、注目したい言葉があるんですね。

2 主は、ユダの王エホヤキムと、神の宮の器の一部を彼の手に渡された。

ネブカドネツアルが強かったからエホヤキム王と神殿の器が自由に略奪された、のではないんです。主は彼の手に渡された。神がそれを許可したので、ネブカドネツアルは成功させることができた。しかし、ネブカドネツアル王は勘違いしました。「俺がやった！」

2 彼は、それ（エルサレム神殿の宝物）をシニアルの地にある自分の（マルドゥーク）神の神殿に持ち帰り、その器を自分の神（マルドゥークの神殿）の宝物倉に納めた。

昔の人たちはこう考えていました。戦争でA国とB国が戦ってA国が勝った場合、“A国が信じている神がB国の神に打ち勝った”。

バビロンのマルドゥークを信じている我々は、ユダヤの国の王をもぎ取った。

ということは、ユダヤの国が信じている主なる神と言われている神は、マルドゥークの手下である。エルサレム神殿の器を偶像神殿の宝物倉に供え物にすることによって、彼は勝ち誇ったんです。「我々の神のほうが上だ。バビロン宗教の偶像の神は、聖書の神よりも偉大で力ある存在だ」と振る舞ったんですね。

バビロンという強い国がユダヤという弱い国を呑み込んだ。力の差によって大が小を食った。

これが一般的な歴史観です。だけど、聖書の歴史観は違います。

これは神がバビロンを使ってなさっていることで、バビロンの力でそうしたんじゃない。

にも拘らず、バビロンは勘違いして、エルサレム神殿の器をそのように運び込んだ。

それに対して、神は必ず裁きをつけるんですね。

ダニエル書に、エルサレム神殿の宝物倉の器が出てくる箇所が他にもあります。

バビロンの最後の王ダリウスが、エルサレム神殿の器にアルコールを注いでどんちゃん騒ぎをしたんです。自分たちの宴会騒ぎに、エルサレム神殿の器を使用したんですね。

「そういえば、昔ユダヤの国をぶっ潰した時、金ぴかの器いっぱいあったの持ってこいや！それにカクテル注いで皆で乾杯や！」みんなアルコールで乱痴気騒ぎをしている真っ最中、ペルシアのクロス王が不意を突いて大軍投入し、一日でバビロンは崩壊しました。

神が支配しているにも拘わらず、俺の力だと奢り高ぶったバビロン。

既に、この瞬間に崩壊が始まっていると言ってもいいんです。

ダニエル書は一貫してこのことを繰り返し語り、教えています。

歴史の本当の支配者は、目に見える強国や将軍、すごい絶対者や支配者・独裁者じゃない。

神が目に見えるそれらの器を使ってこの世界を支配しているのであって、人はへりくだらなければならぬ。畏れなければならぬ。神の前にひれ伏さなければならぬ。

3) 聖書の預言は必ず成就する

1節の前半から、このことを見て取ることができます。

1 ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。

エホヤキム王が連れ去られた時、彼一人だけではなく、王族・貴族たちも一緒に連れて行かれたんですね。捕虜なんです。ユダの国がこれからはバビロンの言うことを聞くように、ということで、一気に滅ぼすのではなく、ロイヤルファミリーを捕虜にして、段階を経て揺さぶりをかけている。

3 王は宦官（かんがん）の長アシュペナズに命じて、イスラエルの人々の中から、王族や貴族を数人選んで連れて来させた。

王族とはダビデの子孫、ユダ族・ダビデの直系の人たち。ずっと先祖を遡るとダビデ王に行きつく人たちを連れて来た。その人たちを管理する責任を任されていたのが宦官の長アシュペナズ。

宦官の長は宦官を管理します。

宦官は人工的に生殖不能な状態にされた役人。なので、宦官の長アシュペナズもおそらく宦官です。生殖活動ができないように生殖部を切り取ったりして、子孫をもうけることができないようにした状態。

実はシュメール語では、宦官を表す言葉が8種類もあるんです。つまり、宦官はよく知られ、昔からこの制度が使われていた。だけど、その8種類の言葉の中には、必ずしも生殖機能を奪われていないことを匂わせる言葉があるそうです。だから断言できません。

アシュペナズは宦官だったでしょう。しかし、宦官の長アシュペナズに管理されていたユダヤの王族・貴族の少年たち全員が去勢されたかどうか言い切ることはできません。

去勢された可能性は高いと思います。はっきり言えることは宦官になったということです。

宦官の中に去勢されていない宦官もあり得たということですから、言いきれないけど、大部分は去勢された人たち。そこは？が付きます。ここはちょっとグレーゾーンにしておきたいと思います。

4 それは、その身に何の欠陥もなく、容姿が良く、あらゆる知恵に秀で、知識に通じ、洞察力に富み、王の宮廷に仕えるにふさわしく、また、カルデア人の文学とことばを教えるにふさわしい少年たちであった。

少年たち。まだアイデンティティが幼い時に、カルデア人（バビロン人）のアイデンティティに入れ替えようとしたんですね。

今ロシアが、ウクライナから連れ去ったウクライナ人の少年たち 6000 人を、ロシア人になる教育を施す施設に入れていっているとされています。そして、その一部で軍事訓練をやっていて、ウクライナと戦うロシア兵士に改造し、再度ウクライナに送り返そうと。

アメリカの大学がそれを発表して、これは子供の人権条約違反だと非難しています。

21 世紀の今ですら、そんな事があるんですね。ましてや 2600 年前の話ですよ。

去勢によって、抵抗するような反抗心をポキッと折って、絶対に抗えないんだという状態にし、しかも忠誠を尽くさせるには、大人になってからでは無理。それで、**少年たち**を呼んだ。

少年はヘブライ語でヤレッド。15～20 歳くらいの年齢層に使う言葉だそうです。

だから小学生ではない。高校生から 20 歳。特性や才能・利発さは大体表に出ていますよね。

宦官の長アシュペナズは今まで色んな民族の王族・貴族たちを見て来たけど、特にユダヤから連れて来た人たちの中に 4 人、突出した人たちがいたんですね。**4 節**には 7 つの良さが書いてあるんですが、こんな人間いてるんか?! みたいな。内も外も中も全部良い。すごい人たちですよ。

彼らを宦官にしたということなら、この瞬間に聖書預言が成就したんです。

イザヤ書 39 章

7 また、あなたが生む、あなた自身の息子たちの中には、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がいる。

これはヒゼキヤ王にイザヤが語った預言です。ヒゼキヤ王は良い王様です。

彼は死にかけたのですが、奇跡的に寿命が 10 年延びて病気が治りました。嬉しかったんですね。

その時、バビロンの王が使者を遣わして「良かったですねえ」と貢物・プレゼントをしたんです。

気分が良くなったヒゼキヤ王は「そんな風に気い使うてもろて、嬉しいわあ。ちょっと、ええもん見せますわ。」宝物倉に行って、神殿で使う神聖な宝物を全部見せました。

「私は病気になったけど、こんな風に奇跡的に回復して。しかも、私にはこんな物があるんですよ!」つい調子に乗って全部見せてしまったのです。

しかしその後、預言者イザヤから大叱責を食らいました。「あなた、異邦人に何見せてるんですか。彼らはそれを見た時、野心持たないとでも思ってるんですか。なんでそんな軽はずみな事、やったんですか。それは伏せておくべきことではないんですか。ぜーんぶ見せてしまつて。だから、あなたはこんなことになります。」

そして言われた預言が **7 節**です。ここに預言の内容が 3 つあります。

①あなたが生む、あなた自身の息子たち；王族の子孫たちにこんな事が起こります。

②捕らえられてバビロンの王の宮殿で；王族・貴族の中でバビロン捕囚になる人たちがいます。

③宦官となる者がいる；連れて行かれるだけでなく、去勢される人たちが出ます。

この預言がダニエル書 1 章で成就したんです。すなわち、ダニエル書を読むことによって、聖書の預言は必ず成就する・必ず実現することを、ここで語っているんですね。

ダニエル書に戻ります。

6 彼らのうちには、ユダ族のダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。

4 人ともユダ族です。王族・貴族と書いてあるのでダビデの血筋でしょう。その可能性が濃厚です。

7 宦官の長は彼らに別の名前をつけた。すなわち、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナンヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

彼らにつけられた新しい名前は、それぞれ偶像に由来する名前です。

ちょうどエルヤキムがエホヤキムに変えられたように、ユダヤ人少年たちの名前は、それぞれバビロン宗教の偶像に因む名前に変更されるんですよ。

しかも、多くのクリスチャンはハナンヤ、ミシャエル、アザルヤってあまり覚えてません。

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴのほうを覚えてるんです。なんでやと思いますか。

七五調だからです。日本人は五七五のリズムに非常に反応する脳を持ってるんですね。

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴのほうがハナンヤ、ミシャエル、アザルヤよりノリがいいじゃないですか。だから、偶像の名前のほうを覚えている。私もそうでした。

今回はそれを挽回しようと必死になって覚え直したけど、明日はどうなっているか分かりません。

彼らは、もし去勢されたのなら生殖機能を奪われ、捕囚によって故郷を奪われ、名前まで奪われたんです。アイデンティティを支えているもの、すなわち生まれ育った故郷・性別・親がつけてくれた名前、それら全部異教のものに取り換えられてしまった。

実に残酷な結末なんですが、ところが、一見残酷なひどい目に遭っているように見える 4 人の少年たちが、ダニエル書で非常に用いられ、やがて、同じように捕囚になって苦しんでいるユダヤ人たちを大いに励ます者にされて行くんです。

聖書の神様は恵みの神です。神様の一見厳しく見える裁きの中にも、恵みが潜んでいるんですね。

ある方が言われていました。いわゆる人間の宗教と聖書信仰・福音とは何が違うのか。

①人間の宗教は人が神に向かって手を差し伸べる。人のほうから神に、あるいは真理に向かって届こうとする努力・営み。これが宗教。

でも聖書が語っている信仰は、神のほうから人に手を差し伸べ、神のほうから人に働きかけ、神が人となって下りて来られた。人がなんとか神に近づこうとするのではなく、神のほうから人に近づいて下りて来て、へりくだって、そばにまで来てくださる。これが聖書のメッセージで、これは全く宗教ではない。

②宗教は大体、一人ひとりの超自然的な経験に基いて確かさを確認している。しかし、それが幻覚だったのか、幻聴だったのか、思い込みだったのか、客観的に確認することはできない。

「奇跡を体験しました！」というのがあるじゃないですか。私もね、もうそれ、疲れます。本当に。

いっぱい色んなことを言って来られるんですけど、それちゃうでと。

「聖書に照らしたら、それ違いますよ！」と言うけど、経験って決定的ですからね。

「高原さんには分からないんですっ！経験してないから！」分からへんよ、そりゃ。分からへんわ、そんなん。

聖書信仰は、聖書預言の成就による客観的に判定できる歴史的事実^①に立脚しているんです。

特に新約聖書の時代になると、イエス・キリストの復活という歴史的^②事実^③に立脚している信仰。

これが福音です。

③何よりも“恵み”という概念。これは聖書だけです。神様は、過去にどんなに大きな失敗をした人にもチャンスを与えます。国を滅ぼす寸前まで行っているような、あるいは捕囚になった後からでも、国が跡形もなく無くなった後からでも、神は常に約束のために働きかけておられる方ですよ。ちょうど水が高い所から低い所に向かって流れて行くように、神様の恵みはへりくだる人、小さくされた人、打ち砕かれた人、罪によって面目を失いペツシャンコになっている人…目掛けて流れ込んで来るのです。

小さくすることが目的というより、小さくなることで恵みを受け取ることができるので小さくする。ユダの場合、最も小さくなるというのは国の領土が減るのではなく、一度ゼロになるということだったんです。これはユダの国を虐めてるんじゃない。恵みによって復興する。回復する。再生する。それを経験させたいという神様の大きなわざだったんですね。

バビロン捕囚で砕かれたユダヤ人に、神が恵みを注いでいかれる典型的な実例が次回です。

歴史を動かしておられる創造主である神を知ろうと思ったら、調べてみることも大事です。

しかし、神に向かって「分かってやる」というのではなく、「主よ、私は自分では理解できない者ですから教えてください」とへりくだる時、この方のことがよく見えて来るのではないのでしょうか。

ダニエル書、次回から多分半分ずつくらいやって行こうと思いますので、よろしければ予習…読んでくるだけでも、1回読むだけでもずいぶん違うと思いますので、そのようにして一緒に有意義な時間になればいいかなと思います。そのことをお勧めして終わります。ありがとうございました。

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017